

# Asia Indicators

発表日: 2026年3月13日(金)

中国、2026年の輸出も出だしは好調を維持(Asia Weekly(3/9~3/13))

~低迷が続いた米国向け輸出にも底打ちの兆しがうかがえる~

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹(Tel:050-5474-7495)

## ○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
3/9(月)	(中国)2月消費者物価(前年比)	+1.3%	+0.8%	+0.2%
	2月生産者物価(前年比)	▲0.9%	▲1.2%	▲1.4%
	(台湾)2月輸出(前年比)	+20.6%	+28.8%	+69.9%
	2月輸入(前年比)	+6.8%	+23.7%	+63.6%
3/10(火)	(韓国)10-12月実質GDP(前年比・改定値)	+1.6%	--	+1.5%*
	(マレーシア)1月鉱工業生産(前年比)	+5.9%	+5.0%	+4.8%
	(中国)2月輸出(年初来前年比)	+21.8%	+7.1%	+6.6%
	2月輸入(年初来前年比)	+19.8%	+6.3%	+5.7%
3/12(木)	(インド)2月消費者物価(前年比)	+3.21%	+3.10%	+2.75%

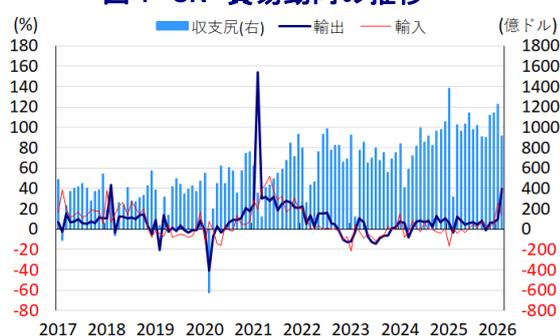
(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。\*は速報値

### [中国]~輸出入ともに底入れの動きが続いており、低迷してきた米国向け輸出に底打ちの兆しがうかがえる~

10日に発表された2月の輸出額は年初来前年比+21.8%となり、昨年12月(同+6.6%)から大幅に伸びが加速した。月次ベースの伸び率は1月(前年同月比+10.0%)、2月(同+39.6%)とともに加速している。なお、今年は春節(旧正月)連休の時期が前年から大きく後ずれしているうえ、連休の日数も9日間と長期間となり、営業日数が異なることに留意する必要がある。こうした事情にもかかわらず、当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は1月、2月ともに拡大しており、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど底入れの動きが続いている様子がうかがえる。国・地域別では、昨年以降の米国との関係悪化を受けて活発化したアフリカ向け(前年比+49.8%)や南米向け(同+16.4%)はともに旺盛に推移しているほか、迂回輸出も拡大してきたASEAN向け(同+29.2%)も高い伸びが続くとともに、接近してきたインド向け(同+19.9%)も堅調に推移するなど、新興国向けは総じて拡大が続いた。EU向け(前年比+29.2%)も旺盛な動きが続いているほか、頭打ちしてきたロシア向け(同+22.3%)も拡大に転じている。なお、米国向け(前年比▲11.0%)は前年を下回る伸びが続いているものの、1月(同▲23.0%)は引き続き大幅マイナスとなる一方、2月(同+9.7%)は徐々に前年を上回っており、関税引き下げの影響などを反映して底打ちする兆しがうかがえる。財別でも、ハイテク関連のほか、コンピュータ関連などのほか、低迷が続いてきたプラスチック製品や玩具、縫製品など幅広い分野で拡大する動きもみられる。一方、2月の輸入額も年初来前年比+19.8%となり、昨年12月(同+5.7%)から伸びが加速している。単月ベースの伸びも1月(前年比+25.6%)、2月(同+13.8%)もともに前

年を大きく上回る伸びとなっており、前月比も拡大が続いているほか、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど輸出同様に底入れしている。国・地域別では、米国（前年比▲25.8%）は引き続き大幅マイナスで推移する一方、米国に代わる穀物などの調達先である南米（同+11.5%）はプラスで推移するとともに、ASEAN（同+12.0%）、アフリカ（同+3.8%）など新興国からの輸入に堅調さがうかがえる。また、EU（前年比+5.8%）からの輸入も底堅さがうかがえるほか、関係悪化による悪影響が懸念される日本（同+19.1%）も堅調に推移している。財別では、半導体をはじめとする電子部品関連や電気機械関連、ハイテク関連で旺盛な動きが続いているほか、銅、鉄鉱石といった鉱物資源関連、肥料の輸入も堅調に推移している。結果、1月の貿易収支は+1126.41億ドル、2月も+909.77億ドルと引き続き黒字基調で推移している。

図1 CN 貿易動向の推移

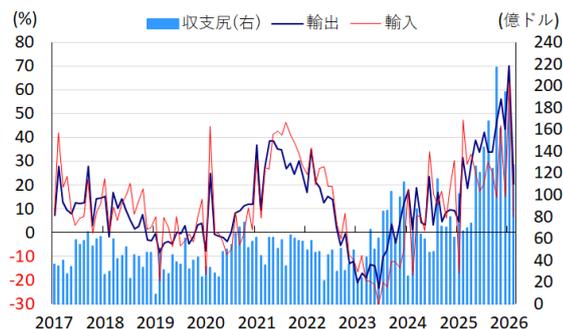


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

### [台湾]～春節の時期のずれを考慮する必要があるが、輸出入ともに底入れの動きが続いた流れに一服感～

9日に発表された2月の輸出額は前年同月比+20.6%となり、前月（同+69.9%）から伸びが鈍化している。前月比は▲6.9%と前月（同+4.5%）から2ヶ月ぶりの減少に転じるなど一進一退の動きをみせるとともに、中期的な基調も減少傾向に転じており、底入れの動きが続いた流れに一服感が出ている。なお、今年は春節（旧正月）連休の時期が前年から大きく後ずれしており、営業日数が前年に比べて大幅に減少したことが影響している可能性がある。国・地域別では、最大の輸出相手である中国本土向けが大きく下振れする一方、米国向けは引き続き旺盛な動きをみせるとともに、欧州向けや日本向けなども堅調に推移している。財別では、食料品や化学製品関連で大きく下振れする動きがみられるものの、鉱物資源関連で堅調な動きがみられるとともに、主力の輸出財である半導体など電子部品関連も底堅く推移している。一方の輸入額は前年同月比+6.8%となり、前月（同+63.6%）から伸びが鈍化している。前月比も▲1.2%と前月（同+6.9%）から2ヶ月ぶりの減少に転じるなど一進一退の動きをみせるとともに、中期的な基調も減少傾向に転じており、輸出同様に底入れの動きに一服感が出ている。財別では、食料品関連やプラスチックをはじめとする素材関連の輸入が大きく下振れする一方、金など宝飾品関連の輸入に堅調な動きがみられるとともに、電子部品関連にも底堅さがうかがえる。結果、貿易収支は+127.66億ドルと前月（+188.93億ドル）から黒字幅が縮小している。

図2 TW 貿易動向の推移

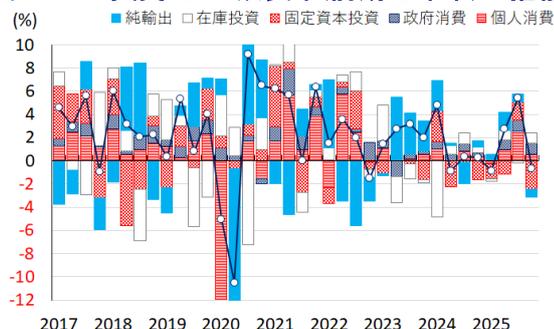


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

### [韓国]～幅広い分野で速報値段階から上方修正の動きがみられるも、2025年通年の成長率は+1.0%どまり～

10日に発表された10-12月の実質GDP成長率(改定値)は前年同期比+1.6%となり、先月発表された速報値段階(同+1.5%)から0.1pt上方修正された。前期比年率ベースの成長率も▲0.64%とマイナス成長ではあるものの、速報値段階(同▲1.10%)からマイナス幅は縮小するなど上方修正されている。項目別では、輸出のほか、個人消費や政府消費、民間部門による固定資本投資がわずかに上方修正されるとともに、輸入も上方修正される一方、公的部門による固定資本投資は下方修正された。こうした動きを反映して、純輸出による成長率寄与度は▲0.71ptと速報値段階(▲1.02pt)からマイナス幅が縮小している。一方、在庫投資による成長率寄与度は+0.86ptと速報値段階(+1.18pt)からプラス幅が縮小しており、在庫積み上がりの動きが成長率を押し上げる動きは弱まるなど、好悪双方の材料が混在している。なお、2025年通年の経済成長率は+1.0%と速報値段階と同じであり、前年(+2.0%)から鈍化して5年ぶりの伸びにとどまったことは変わらない。

図3 KR 実質GDP成長率(前期比年率)の推移



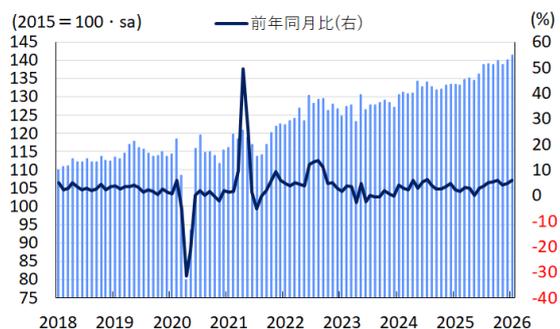
(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

### [マレーシア]～鉱業部門の生産は低迷が続く一方、外需関連を中心とする製造業で生産拡大が続いている～

10日に発表された1月の鉱工業生産は前年同月比+5.9%となり、前月(同+4.8%)から伸びが加速している。前月比も+0.88%と前月(同+0.90%)から2ヶ月連続で拡大しており、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど底入れの動きが続いている。分野別では、天然ガスを中心とする鉱業部門の生産は引き続き下振れする展開が続く一方、製造業のうち石油化学関連の生産は弱含んでいるほか、自動車など輸送用機械関連の生産は力強さを欠いているものの、主力の輸出財である半導体など電子部品関連や電気機械関連の生産は力強い動きをみせるとともに、金属加工関連の生産も底堅い動きをみせるなど、

外需関連が生産をけん引する展開が続いている。さらに、経済活動の動向に連動する傾向がある発電量も拡大基調が続いており、経済活動が活発な動きを維持している様子がうかがえる。

図 4 MY 鉱工業生産の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以 上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。